

全国美術館会議機関誌
全美フォーラム

ZENBI FORUM

全国美術館会議機関誌

全美フォーラム

ZENBI FORUM

01
F-02

令和6年能登半島地震後の七尾美術館の活動について

石川県七尾美術館 河野 喬紀

02
F-05

DIC 川村記念美術館の適正な存続を
願う要望書と署名活動について

—— 報告と私見

多摩美術大学美術館 大島 徹也

03
F-11

美術館がアートフェスを開催する意義とは何か
—「AOMORI GOKAN アートフェス 2024〜つらなりのほらっぱ〜」

弘前れんが倉庫美術館 木村 絵理子

札幌美術展

マイ・ホーム(仮)

*Home: How do you create
your life and happiness?*

2025.3
発売予定

暮らし、制度、ルーツ、コミュニティーなど、ホームを形づくる様々な要素をテーマとした展覧会出品作品の他、出品作家6人のインタビューも掲載します。

[出品作家] 葛西由香 小林知世 武田浩志 田中マリナ 長坂有希
南阿沙美 米坂ヒデノリ

「札幌美術展 マイ・ホーム(仮)」図録

編集:札幌芸術の森美術館

B5変型判・96頁 定価:2,200円(税込)

書店およびAmazonにて販売いたします。電子書籍も販売いたします。



頼りない、されど愛しい、マイ・ホーム。



NAKANISHI PUBLISHING CO., LTD.

中西出版株式会社

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号

TEL(011)785-0737 FAX(011)781-7516

URL: <https://nakanishi-shuppan.co.jp>

E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp



〔展覧会情報〕

2025.1.18 Sat - 3.9 Sun

午前9時45分～午後5時(入館は閉館の30分前まで)

月曜休館 ※2月24日は開館し、翌2月25日は休館

主催/札幌芸術の森美術館(札幌市芸術文化財団)

後援/札幌市、札幌市教育委員会

札幌芸術の森美術館

札幌市南区芸術の森2丁目75番地

TEL 011-591-0090 <https://artpark.or.jp/>

令和6年能登半島地震後の 七尾美術館の活動について

河野 喬紀

Takamori Kono (石川県七尾美術館)

2024年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」によって、能登地域は甚大な被害に見舞われた。「能登唯一の総合美術館」である石川県七尾美術館（以下、当館）も被害を受け、浄化槽の破損やエントランス等の壁の剥落が確認され、今もなお臨時休館となっている。地震発生当時は所蔵品展を開催中だったが、展示中の彫刻作品の一部が転倒し破損したものの、陶磁器類は徳利などの背の高い作品には免震台を使用していたこともあり無事だった。なお、筆者は石川県外へ帰省中であつたが、半島という地理的状况もあり七尾に戻るまで時間を要し、もどかしい日々が続いた。初めは残りの学芸員2名が作品点検、出品者・寄託者・関係者等への電話やメール対応を行い、筆者が七尾に戻った頃から作品修理の依頼、一部作品の移動等を行った。当館所蔵品の中核をなす「池田コレクション」は陶磁器類を中心とした美術工芸品で、それぞれの桐箱を開け、一つ一つの作品を調査と照らし合わせながらチェックしていく作業や、小品の石膏作品のチェックは思いのほか時間がかかった。3月末までは館内の地震被害のうち、急を要する事柄について対応し、それが一段落した4月以降は以下のような取り組みを行った。

①出前授業の実施

七尾市では「ふるさと七尾SDGs教育」と銘打って、市内の公共文化・歴史施設等で、探究・体験学習を推進している。当館では毎年春に「長谷川等伯展」を行っていること



被災画像（浄化槽）

もあり、市内小学校（高学年）が団体鑑賞するのが定番となっていた。しかしながら、当館の臨時休館により子どもたちが長谷川等伯について学べる機会が少なくなってしまうため、出前講座を行い、その生涯と作品の見どころを紹介している。また、所蔵品のうち小品のブロンズ彫刻等持ち運び可能なものを数点選び、児童が間近で美術品を鑑賞し、作品の見方や面白さをレクチャーする出前講座も実施している。

当館だけではなく、七尾の重要な歴史遺産の一つ、山の寺院群や和倉温泉等も深刻なダメージを受けており、これまで地域学習の拠点であつた場所の復興もまだまだ見通せない。今回のような大災害が起きたからこそ、子どもたちには自身の住む地域について見つめ直し、より深く知る機会が必要であらう。当館では引き続き出前講座等で子どもたちへの学習支援に積極的に協力していきたい。

②文化財レスキューへの参加

発災直後より、当館に隣接する山の寺院群の複数のお寺から寺宝の一時預かりを依頼があつた。山の寺院群は特に被害が大きく、堂宇が崩壊寸前のお寺も少なくない。このような状況下で、何とか救い出された仏像や仏画について、七尾市教育委員会の担当課と相談しながら、特に重要なものについて一時預かりの措置を講じた。七尾市では1月下旬に「家庭や地域の古い文書や美術品の保全」に関するお知らせを出しており、当館にも片付けの最中に見つかった美術工芸品について調査依頼が入ってきた。そこで、実際に現場に向いて調査を行い、その対処方法についてアドバイスするとともに、寄附の意向があり、かつ当館の収集方針に沿うものについては寄附手続きを進めた。

今回の震災では東日本大震災や熊本地震と比べると文化財レスキューの要請が特に多いと言われている。当館学芸員が独立行政法人国立文化財機構文化防災センターの実施する文化財レスキュー事業に参加したのは6月に入ってからのことだった。全国か



文化財レスキューの様子

ら多くの学芸員が参加し、暑い日に汗だくになりながら梱包・運び出しをする姿に心打たれるとともに、地元の学芸員として長期にわたる復興の中でどのように関わり続けられるかを模索していく必要性を感じた。

③石川県立歴史博物館での移動展の実施

10月19日から11月17日まで、石川県立歴史博物館（以下「歴博」）にて当館所蔵品および寄託品を紹介する「七尾美術館 in れきはく」という移動展を実施した。歴博では早くから文化財レスキューに注力すべく、特別展の予定を一部白紙としていた。そんな中、七尾での文化財レスキューに当館及び歴博学芸員が参加した際、臨時休館が続く当館の現状を知った歴博学芸員より「歴博で出張展を行いませんか？」とお声がけいただいたことで実現した。金沢で当館所蔵品・寄託品が一堂に展示されるのは初めてのことで、今まで当館に足を運んだことがない方にも当館の活動を知っていただく機会となった。

今回の震災では県内外の美術館・博物館関係者や、これまでの展覧会活動等でご協力いただいた寺院・機関・個人の方々が能登地域に思いを寄せていただき、当館にも温かい言葉をかけていただいた。また、全国美術館会議からは「全美で何かできることはありませんか？」とお声がけいただき、文化財レスキューに参加する状況下で在庫が少なくなっていた梱包用枕と薄葉紙をご寄附いただいた。心を寄せていただいている全ての皆さまに、この場を借りて御礼申し上げます。

D I C 川村記念美術館の適正な存続を お願いする要望書と署名活動について

―報告と私見―

大島徹也

Tetsuya Oshima (多摩美術大学美術館)

2024年8月27日、D I C 川村記念美術館（以下「川村美」）の運営母体であるD I C 株式会社（以下「D I C」）が、「価値共創委員会による『美術館運営』に関する助言並びにそれに対する当社取締役会の協議内容と今後の対応についての中間報告」という、川村美の今後の運営に関する重要な文書を発表した。そこには、次のことをこれからD I C が行うことが明記されている。

- (a) 美術館運営の効率化のため、「ダウンサイズ&リロケーション」を具体的なオプションとして検討し、2024年12月までに結論付けること
- (b) 上記を基本的な方針としつつ、「ダウンサイズ&リロケーション」の実現性、ブランド価値向上の有効性、作品売却による経済価値等を総合的に勘案し、美術館運営の中止の可能性も排除せず、詳細検討を行うこと

〔傍線引用者〕

この事態を強く憂慮する全国美術館会議（以下「全美」）の有志一同が、「D I C 川村記念美術館の適正な存続をお願いする要望書」を、2024年10月30日にD I C に提出した。そして、そのために同年10月10日から24日までの間、有志代表（貝塚健「千葉県立美術館」、大島徹也「多摩美術大学美術館」、安田篤生「高知県立美術館」）が、「D I C 川村記念美術館の適正な存

続を求める署名活動」を、全美の正会員館職員及び個人会員を対象として行っていた。本稿では、その一連の動きの報告を行いつつ、今回の問題において要望書提出時点までに私が個人的に考えたことを述べたい。

なお、紙幅の関係上、要望書や署名集めの文面については、ここで詳しく記すことができない。両方とも全美の正会員館と個人会員には公開されているものなので、本稿とともに一読いただきたい。また、この一文の全美広報委員会への原稿提出締切りは、あいにくD I Cによる結論公表（2024年12月）より1ヶ月以上前であり、私はその結論をまだまったく知りえない時期（2024年10月末）に本稿を書いていることをお含みいただきたい。

2024年8月27日のD I C発表についての懸念点

2024年8月27日のD I C発表について最も懸念される点は、同社が、「当社として美術館運営を継続する意義」を示してはいるものの、「美術館運営の中止の可能性も排除せず」としていることである。これは要するに、「閉館」という選択肢があるということである。

次に、「作品売却」の可能性も明言されている。マーク・ロスコ、フランク・ステラ、ジャクソン・ポロックなどの素晴らしい作品たちは、どうなるのだろうか。作品売却においてとりわけ心配なのは、売られた先で作品が公開されずに死蔵されてしまうことである。ちなみに、D I Cには、2013年にバーネット・ニューマンの《アンナの光》という極めて重要な所蔵作品を海外企業に売却した前例がある。そして、その時にD I Cが発表した「当社保有の絵画の譲渡に伴う特別利益の計上及び業績予想の修正について」という文書によれば、「当社は、同作品が一般公開される予定であることを、譲渡先である海外企業より確認しております」とのことだったのだが、結局《アンナの光》がその後

一般公開されているという話は、今日まで聞いたことがない。（この一件については、今回の問題の参考のために、本誌6号「2014年8月」に掲載の「コレクションはいま」という拙稿をぜひお読みいただきたい。10年前にその一文を書いた時よりも川村美はさらに深刻な事態に追い込まれており、私はなんとも言いようのない気持ちである）。

そして「ダウンサイズ」（縮小／削減）という処置であるが、これも非常に気になる。意味の詳細や「ダウン」の規模が分からないからだ。「箱」のみならず「コレクション」も「人員」も「大幅に」減らすという可能性もあるわけである。

そんな発表が、8月27日にD I Cから世間に向けてなされたのだった。そこで今回の要望書では、主に次のお願いを、D I Cの代表取締役社長執行役員（池田尚志氏）に宛てて行った。

- ① 2017年に全国美術館会議が策定した「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」の理念を尊重し、美術館の社会における意義を踏まえて、貴社の美術館の運営を変更される際には、可能な限り現状を維持し、これまでの同館の歴史や実績を発展させられるよう適正な形で継続されることをお願いいたします。
- ② 企業の社会的責任や存在意義を多様な観点からお考えになり、社会からの期待と要請に応えられるような最終的結論を導くよう希望いたします。
- ③ 貴社の美術館の活動に現在従事されておられる方々、関与されている方々の、これらの自己実現に支障が生じないよう、特別な配慮をいただくよう希望いたします。

全美の美術館運営研究部会内での動き

今回の全美有志による署名活動と要望書の提出は、もともととは美術館運営研究部会（以下MRG）内で話が始まったものだった。全美本体もしくはMRGで何かアクションを起こすことについて、貝塚氏・安田氏・大島の3人を中心に議論が行われていったが、し

かし、MRG内で、賛成にせよ反対にせよ何らかの全体的合意は形成されていかず、かつ、全美理事会で何か話し合われる気配もなく、日が過ぎていった。このままでは埒が明かない、そうこうしているうちにDICの方針が社内では固まってしまうだろう、そうなるからDICに何か言っても遅い（繰り返すと、コレクション散逸や閉館の危険性も孕んだ事態なのだ）。そうして結局、「全国美術館会議有志」として、（DICへの批判のようなものではまったくなく）川村美の「適正な存続」をDICに「お願い」する文書を同社に出そう（→どうするのが「適正」なのかは、要望書を読んで同社にしっかり考えていただきたい）、その賛同者を全美の正会員館職員及び個人会員から募ろう、ということに、貝塚氏・安田氏・大島の3人で決めた。

なお、「有志」とはいえ「全国美術館会議」の名称を頭に付けることについては、署名集めの開始前に、富田章会長及び理事全員に可否をお聞きしてある（その過程では、山梨俊夫事務局長がもろもろ間に入ってくれた。また、富田会長からは、個人的な了解を逸早くいただいた）。

全国美術館会議とは

それにしても、私は、今回の署名活動が全美有志というかたちで開始できるようになるまで、「全国美術館会議」とは何を「会議」する組織なのだろうか、苦しく自問していた。

全美は1952年の発足以降、時代の流れの中で、美術館自体が抱える問題や美術館を取り巻く環境の変化に合わせて、性質や構造をだんだんと変えて発展してきた。とすれば、今回のような問題も、全美とは会員館わずか1館、しかも企業が直営する私立館の縮小／閉館について、全体で議論したり対外的に反応することを目的とした組織ではないということで、全美として動くことに頑なに否定的であったり、冷たく無関心でおらず、この機会に、せめて全美の活動の一部を考え直すことを試みても良かったのではないか。（ちなみに、千葉市近隣美術館連絡会は、「DIC川村記念美術館がこれまでとおり佐倉市に存続し、従来の活動を

展開していくこと」や「コレクションと活動の『ダウンサイズ』が不可避であったとしても、この地で歴史をつないでいけること」を願う声明を、「報道関係各位」に2024年9月17日に発表している。）

実際には、先述のように全美の活動の一部再考を丁寧に議論している時間はなかったもので、今回は機動的に有志行動ということになったが、その問題は、今後全美が（どういう結論を出すことになるにせよ）考えていく必要があるのではないだろうか。

今回の署名活動の手順と結果

今回の署名活動は、全美の正会員館職員と個人会員を対象に行った（賛助会員及び非会員館の方は対象外）。「職員」とは、学芸員はもちろんのこと、事務職員なども含んでいる。また、常勤が非常勤かなども区別してはいない。これは、全美が定めた「美術館の原則と美術館関係者の行動指針」の対象が「美術館に携わる者」となっていることを考慮しての設定である。また、目標署名者数は「416人」としたが、「416」というのは全美の現在の会員館数と同数であり、象徴的な数字として設定したものである（それ以上の意味はない）。署名集めにはGoogleフォームを利用し、そのURLを有志代表が全美の2024年版会員名簿に掲載されている各館及び個人会員のメールアドレスにメールで伝えるとともに、メール受信者に対して周知を依頼した。

結果として、正会員館職員から242筆、個人会員から19筆、計261筆の署名が集まった（目標として掲げた数字には大きく届かなかったが、署名してくださった方々には、それゆえにいつそつ、心より感謝申し上げます）。そして、要望書と全署名は、「全国美術館会議有志によるDIC川村記念美術館の適正な存続をお願いする要望書と署名」として1冊にまとめ、2024年10月30日に貝塚氏と私の2人でDICを訪れて、同社の担当部署（コーポレートコミュニケーション部）の責任者の方に直接手渡しで提出した。署名用Googleフォームには、DICへのメッセージを自由記述する欄も設けており、各署名者がそこに記入してくださった個人的思いも、

すべてそのままD I Cに伝えてある。ちなみに私は、大企業が文化面で負っている大きな社会的責任をD I Cには改めて意識していただきたいこと、そして、その社会的責任に基づいて、コレクションを散逸させてしまわないことを、特にお願した。このようなお願いは、純粹にビジネス的な観点からすれば、部外者による幼稚な干渉であろう。しかし、いろいろな立場からいろいろな意見があつて良い。自分も含めて全美有志の方々の意見をD I Cに伝えることは、今回やはり重要だと思つたし、今でもその思いに変わりはしない。

2024年12月にD I Cがどんな結論を発表するかは、この原稿を書いている現時点では分からない。しかし、佐倉市公式ウェブサイトで行われている「D I C川村記念美術館の佐倉市での存続を求める会」による一般公開の署名活動に加え、それとは別のものとして意図的に全美内に限定した全美有志の、すなわち、全国の美術館のプロフェッショナルという専門的立場からの要望は、無視できない影響をD I Cの最終結論に対して及ぼすと信じたい。

【付記】

今回の署名活動と要望書提出は、もちろんD I C川村記念美術館という一つの美術館の「適正な存続」のために行つたのだが、私個人としては、目の前のその一館のこのことを思っているのでもない。もし今回私たちは無力で失敗に終わるかもしれないとしても、これは川村美だけの問題ではない。こういう時には全美の少なくとも誰か有志が何か発言をするという前例を今回の署名活動によって作ることで、それが、今後も哀しくもいずれどこかで生じるであろう別の館の閉館危機等に関して、少しでも設置者サイドにとって心理的な牽制になり、さらに、世間の人々の関心を喚起し大きくしていくきっかけとなれば、という思いも強く込められている。

(2024年10月31日)

03

美術館がアートフェスを開催する意義とは何か ——「AOMORI GOKAN アートフェス2024」つらなりのはらっぱ——

木村絵理子

Eriko Kimura (弘前れんが倉庫美術館)

青森県内にある5つの美術館とアートセンター（青森県立美術館、青森公立大学 国際芸術センター 青森 弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館、十和田市現代美術館）では、2020年より青森アートミュージアム5館連携協議会を立ち上げて、県内にある美術館同士で緩やかに連携しながら、広報をはじめとする共同事業をおこなってきた。5館は県と市が設置した公立の施設で、それぞれ青森県、青森市、弘前市、八戸市、十和田市という1県4市の異なる自治体に所属している。このように、同一の県内にある博物館等の施設が連携するためのプラットフォームとしては、各県が設置する博物館協会などが類例として挙げられるだろう。ただし博物館協会の場合は、各館の専門領域を超えて、博物館・美術館がミュージアムとしての共通の制度的・機能的な課題を共有する場としての性質を備えているのに対して、青森アートミュージアム5館連携協議会は、いずれも現代美術を扱う施設として、専門領域と観客層が共通する点に立脚し、対外的な発信に重点を置いた活動であることが特徴的だ。

発足当初は共通ウェブサイトの開設や、ボランティア活動・博物館実習の相互交流など、日常的な活動を基盤においてきたが、2024年4月から9月にかけて、初めて大型の共同事業として、これら5館を会場に、「AOMORI GOKAN アートフェス2024」つらなりのはらっぱ」と題した現代美術のアートフェスを開催した。本ア

トフェス開催までの経緯については、2024年6月に弘前で開催された全国美術館会議社員総会の特別行事として、5館の館長登壇によるシンポジウムを開催したため、詳細はその総会の報告書を参照いただきたい。また経済波及効果などを含むアートフェスの報告書は2025年初頭に発行予定であり、数値上の報告は現時点では難しい。そこで本稿では、一般的な地方芸術祭とは異なり、美術館がアートフェスを開催する意味について、一開催館としての立場から記したい。

「AOMORI GOKAN アートフェス2024（つらなりのはらっぱ）」は、一般的な芸術祭のように一つの大きな展覧会ではなく、5館それぞれが企画した独自の展覧会の集合体としての特徴を持っている。「つらなりのはらっぱ」というタイトルは、青森県立美術館の設計者である建築家・青木淳氏が著書『原っぱと遊園地…建築にとつてその場の質とは何か』で論じた「原っぱ」という場の概念（特定の目的のために予め規定された場所ではなく、自然発生した領域であり、そこでの活動は自主性によって担保される）に触発されたものであった。5館それぞれが独立した「原っぱ」となって、それらが連なっていく様をイメージしたものであり、展覧会自体の内容を直接的に示すものではない。そうした緩やかなつながりを意識しながら、各館それぞれの学芸員が企画したバリエーション豊かな展覧会6種をアートフェスの「メイン企画」と位置付けた。展覧会の集合体としての「メイン企画」の他には、5館の「共通企画」と「ラーニング」、加えて共通チケットとガイドブックの発行が事業の柱となった。「共通企画」とは、会期後半である8月に5館を巡回したアーティストの栗林隆による屋外作品《元気炉》を指す。栗林隆の《元気炉》は、作者がタイのスチームサウナに着想を得て、ハーブや薬草の香りを帯びた蒸気を浴びる体験が可能な作品であり、本アートフェスでは、この《元気炉》が5館を巡る「Aomori GENKI-RO Trip」として、地元の伝統音楽の演奏家や映像上映を交えつつ、アートフェスのフィ

ナールを飾る連続屋外イベントとなった。また、ラーニングのプログラムでは、5館の「メイン企画」出品作品をモチーフにした鑑賞ワークシートの制作と、県内の高校生に向けた哲学対話のワークショップを実施した。

最終週には、5会場の「メイン企画」入場者が30万人に達し、筆者所属の弘前れんが倉庫美術館では開館以来過去最高の入場者数を迎えるなど、アートフェスとして一定のプレザンスを獲得できたといえるだろう。当初から予想されていた交通の便の悪さもあり、5会場全てを周遊した来場者の数は限定的であったが、弘前会場のアンケート結果からは、来場者の半数以上が複数館を巡っていたことが判明した。加えて通常に比して、県内の来場者割合が大幅に増加。県外からの旅行者よりも、地元にながら普段美術館へ行く習慣のない人たちへの訴求力の増加が確認できた。美術館が観光拠点としての役割を求められる空気の中で、県外よりむしろ県内の来場者が、最寄りの美術館以外の県内複数の美術館へも足を運んだという実績は、地方都市の公立美術館がアートフェスを開催する上での最大の成果だったと言えるだろう。また、そこで来場者が目にした展覧会（「メイン企画」）は、各館の学芸員が企画したそれぞれに異なる内容のものである。本アートフェスは、こうして、青森県内には5つの選択肢があり、身近に多種多様な美術館がある大都市圏とは異なる地方にあっても、展覧会をはじめとする多様な芸術体験を比較対照する楽しみを創出し、美術館がアートフェスを開催することの意義を示し得たのではないだろうか。



AOMORI GOKAN アートフェス 2024「メイン企画」の一つ「弘前エクスチェンジ #06 白神眼見考」での狩野哲郎作品展示風景（弘前れんが倉庫美術館）撮影：木奥恵三



AOMORI GOKAN アートフェス 2024「共通企画」栗林隆「Aomori GENKI-RO Trip in 弘前」の様子